

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

| | |
|-------|-------------------|
| 住所 | 岡山県岡山市北区内山下 2-4-6 |
| 管理機関名 | 岡山県教育委員会 |
| 代表者名 | 教育長 鍵本芳明 印 |

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
平成31年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日
- 2 指定校名
学校名 岡山県立岡山操山中学校・高等学校
学校長名 近藤 治
- 3 研究開発名
「和して流れず」の精神で、岡山と日本の未来を切り拓くグローバル・リーダー
- 4 研究開発概要
グローバル・リーダーに必要な「5つの資質・能力」の向上を目指して、次の3つの研究開発単位の取組を行い、その相乗効果により、「和して流れず」の精神をもって、世界の課題に果敢に挑戦するグローバル・リーダーを育成する。
 - (1) 研究開発単位Ⅰ「未来航路」(未来航路は、総合的な学習(探究)の時間の校内名称)
中学校から高校までの6年間を見通して系統的・発展的に、岡山・日本・世界の課題を発見し、その課題を研究することにより、全校生徒の資質・能力を向上させる。
 - (2) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」
意欲のある生徒を異学年集団で組織し、海外の高校生、岡山大学の教員・大学院生・外国人留学生、企業関係者等多様な人と協働し、グローバル社会における課題の解決を目指して研究することにより、将来国際社会で活躍できる高い資質・能力を育成する。
 - (3) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」
「授業で資質向上プロジェクト」において、各教科で育成する「5つの資質・能力」の教科目標を設定し、アクティブ・ラーニング等により授業改善を図り、生徒の資質・能力

を向上させる。「英語力向上プロジェクト」において、外国人と対等にコミュニケーションをとることができる英語力を育成する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|------------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 進捗状況把握 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 運営指導委員会の開催 | | | | | ○ | | | | | ○ | | |
| 岡山大学等との連携 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

(2) 実績の説明

(ア) 事業の管理

指定校との連携を密にし、学校訪問や課題研究発表会等の参観を通して、事業計画の進捗、教育課程の改善、課題研究や授業の改善等について、管理機関で状況を把握し、指導・助言等を行った。また、事業推進に係る確認事項等について、文部科学省と連絡を取り、事業目的が達成されるよう指定校への共通理解を図り、中間評価での指摘事項への改善・対応状況の確認も行った。年2回の運営指導委員会では、学識経験者及び企業関係者等から事業の実施内容や方法について指導・助言を受け、事業改善に反映させた。また、指定終了後の指定校の在り方についても意見をいただき、参考とした。

(イ) 事業推進に係る環境整備

高大連携の取組を生かして、本事業では岡山大学の教員からの指導や、大学生・大学院生によるTA等としての支援が得られやすい環境整備を行った。各校の取組の実践発表により県内の好事例を普及させ授業改善を推進するため、県内の指導教諭を対象とした中核教員指導力向上研修を開催し、指定校もポスター発表等を通して成果を普及した。また、各校の学力向上の取組を中心として進める教員を対象とし、全県立高校が参加する合同分析会において、指定校はSGHの5年間の成果と課題を報告し、他校の教育活動の参考となる実践例を提供した。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程 [注] (○)は臨時休業のため未実施。

(ア) 研究開発単位I「未来航路」

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|--------------------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| グローバル講演会 (1・2年) | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | | (○) |
| ディベート (1年) | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Global Can-Do List の活用と評価 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 教科研修・教科会議 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

(2) 実績の説明

(ア) 研究開発単位 I 「未来航路」

①1 年次生（課題研究の基礎力（グローバルスキル）を育成し、次年度の課題研究に繋げる）

・グローバル講演会

[第 1 回]

実施日：平成 31 年 4 月 16 日（参加人数 1 年次生 280 名）

講師：就実大学 教授 林 俊克 氏（SGH 運営指導委員）

演題：グローバル人材とは

その他：講演会后，グローバル社会で生きることについてクラス討議・ポスターセッション形式での発表を実施

[第 2 回]

実施日：令和元年 5 月 29 日（参加人数 1 年次生 280 名）

講師：関西学院大学 学長室学長特命 尾木 義久 氏

演題：世界で生きるチカラ

[第 3 回]

実施日：令和元年 6 月 5 日（参加人数 1 年次生 280 名）

講師：株式会社力の源ホールディングス

取締役 Asia 事業本部本部長 矢野 亮太 氏（本校卒業生）

人事総務本部 関口 照輝 氏

演題：Japanese wonder to the world ～グローバル社会への挑戦～

その他：講演会后，ラーメンで世界進出をテーマに課題研究を行い，ポスターセッション形式での発表を実施

[第 4 回]

実施日：令和元年 10 月 2 日（参加人数 1 年次生 280 名 中学 2 年生 120 名）

講師：株式会社フジワラテクノアート

代表取締役社長 藤原 恵子 氏（本校卒業生）

演題：岡山から世界へ ～日本食と未来をささえるしごと～

その他：講演会后，控え室での講師との懇談会，会社訪問（希望者）を実施

[第 5 回]

実施日：令和 2 年 1 月 15 日（参加人数 1 年次生 280 名）

講師：岡山大学大学院 社会文化科学研究科 教授 黒神 直純 氏

演題：研究をするということ～研究を進めるに当たって～

[第 6 回] 【臨時休業のため未実施】

実施日：令和 2 年 3 月 6 日

（参加人数 1 年次生 280 名，2 年次生 274 名，中学 1 年生 120 名）

講師：株式会社アイエスエイ関西支社 支社長 佐田 創 氏

演題：グローバル社会に必要な人財とは

～可能性は無限大，世界は君たちを待っている～

- ・ディスカッション，ディベート手法を用いたグローバルスキルの実践
 ディスカッションテーマ：60年の間に日本の結婚のあり方はどのような変化をとげたか
 ディベートテーマ：日本は75歳以上のすべての高齢者の運転免許返納を義務化すべきである
 ディベートクラス大会を12月11日，学年大会を12月25日に実施。学年大会時の様子はメディア取材（新聞，テレビ）により県民等へ周知できた。
- ・GPS-Academic（5月）及びSGHアンケート（1月）の実施
- ・次年度課題研究へ向けて
 SDGs基礎知識の習得。社会課題とSDGsの結びつきの考察と世の中で起きていることとの関連性の理解。
- ②2年次生（6研究分野ごとに，研究テーマを設定しグループ研究を行う）
 - ・課題研究中間発表
 実施日：令和元年10月30日
 内容：分野ごとに中間発表を行い，大学教員から研究内容や手法など進捗状況の指導。
 - ・課題研究分野別発表会
 実施日：令和元年12月18日
 内容：分野ごとに研究発表会を実施し，大学院生及び大学生，本校教員，生徒間での相互評価により代表グループを決定。
 - ・未来航路課題研究発表会
 実施日：令和2年1月28日（参加人数 1年次生280名，2年次生274名，中学1年生120名，中学2年生120名，他校生徒18名）
 内容：各分野の代表グループによる発表とすべてのグループによるポスターセッション並びに東京学芸大学附属国際中等教育学校，岡山県立岡山城東高等学校，岡山学芸館高等学校，SOZAN国際塾の代表グループによる発表。岡山県知事や他校教員，保護者等が参観。またG20保健大臣会合（令和元年10月19日）で高校生の提言を発表した生徒が岡山県知事にその取組を報告。
 - ・岡山大学の教員による分野ごとの指導（3回実施）
 研究テーマ決定に向けた指導（5月15日），研究実践の確認に関する指導（7月17日）
 研究分野別中間発表会における指導・評価（10月30日）
 - ・岡山大学大学院生等（TA）による分野ごとの指導（5回実施）
 研究テーマ・内容・方法の検討・決定に関する指導（6月5日），研究実践に関する指導（10月2日），研究実践・系統別発表会準備・論文作成に関する指導（11月13日），研究分野別発表会に関する審査・助言（12月18日），課題研究発表会準備・論文作成に関する指導（1月15日）
 - ・修学旅行（関東方面）における企業，関係機関，大学等の訪問
 実施日：令和元年6月19日
 訪問先：大塚製薬株式会社，近畿日本ツーリスト，富士ゼロックス，東京証券取引所，文部科学省生涯学習政策局，理化学研究所，国連大学，法政大学，上智大学，東京女子医科大学，東京芸術大学等
 内容：課題研究に関係する企業，関係機関，大学等の訪問し，研究に関するインタビューを行い研究に生かす。
 - ・GPS-Academic（12月）及びSGHアンケート（1月）の実施
 - ・志望理由書の作成（学びの履歴書と今後の学びの設計書作成）

③3年次生（希望者選択、各自の進路に向けた課題研究による学問入門）

- ・課題研究のためのデータ収集と分析、考察（4月～6月）
- ・地域地理科学会大会でポスターセッション

実施日：令和元年6月30日

内容：研究者から指導助言を受けて課題研究の修正とさらなる分析・考察

- ・第1回SGH運営指導委員会で研究内容の発表、指導助言（8月22日）
- ・統計データ分析の基礎を理解するため、新たな課題研究を実施（8～10月）

研究内容を統計データ分析コンペティション（総務省等主催）に応募し特別賞を受賞

- ・課題研究の加筆・修正とさらなる分析・考察、各自の進路希望の学問分野の文献講読（10月～12月）

(イ) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」

1年次生の課題研究については「研究途中での研究テーマ変更とそれに伴うグループの再編成による研究の遅れ」という昨年の反省を生かし、時間を十分に取ってグループ編成を行った。テーマ選定についても、講義を行い、各生徒のテーマについて助言を複数の教員で行い、テーマ設定のために十分な時間をかけた。2年間の研究であることを強調し、1年目は文献を中心にしっかりと調査を行い、研究を進めさせた。今後は、フィールドワークにより、研究を深めることとしている。2年次生は、情報やデータを集めるのが難しいテーマもあるため苦労しているグループもあったが、熱心に活動を行い、様々な方面と連絡を取り、実際に調査に行き、研究を深めることができた。今後の課題は、インターネット、文献調査、インタビューや実験、フィールドワーク等を通して得た情報を分析する力を高めていくことである。生徒は積極的にフィールドワークを行ったが、それらの活動を通じて得た情報を分析する場面でどの方法を用いて良いのかが分からず、苦戦していた。また、せっかく収集した情報をうまく分析することができずに、自身の課題研究に十分に活かすことができない場合もあった。今後は分析方法について指導する時間をより多く設定し、実践や演習等を通じて適切な分析方法を身に付けさせていく必要があると考える。

①他SGH校との連携

- ・東京学芸大附属国際中等教育学校（4名）、岡山県立岡山城東高等学校（7名）、岡山学芸館高等学校（7名）との課題研究を通じた意見交換会（1月28日 本校14名）
- ・岡山県立岡山城東高等学校課題研究発表会への参加（2月5日 参加人数11名）
ステージ発表1グループ・ポスターセッション2グループ
- ・岡山学芸館高等学校課題研究発表会への参加（2月15日 参加人数3名）
ソーシャルリーダーシップオータムキャンプ2019（岡山学芸館高等学校主催）参加生徒が岡山学芸館高等学校の生徒と連携し合同発表。

②SGUとの連携

- ・岡山大学SDGs学生アンバサダーキックオフミーティングへの参加
(7月31日 参加人数5名)
- ・岡山大学特別講義への参加（8月3, 4日 参加人数6名）
- ・岡山大学サイエンスカフェへの参加（11月8日 参加人数3名）
- ・岡山大学統合報告フォーラム2019への参加（11月26日 参加人数2名）
- ・関西学院大学においてグローバルキャンプの実施（8月1, 2日 参加人数21名）
国際情報分析に関する講義の受講と演習。与えられた4つの課題のテーマに沿って研究、発表。大学教授・大学生による指導・助言・評価。

③校内発表

今年度、校内発表は8回行い、昨年度より回数を増やした。併設中学校の教員や生徒にも案内をし、多数の出席者から多くのフィードバックを得たことだけでなく、SOZAN 国際塾の活動を幅広く知ってもらえる場となった。主な発表の場は次の通り。

- ・新入生歓迎会 代表1グループによるステージ発表(4月13日 発表人数4名)
- ・海外研修報告会 参加者全員によるステージ発表(5月24日 発表人数12名)
- ・夏季報告会兼発表会(8月29日 発表人数45名)
- ・学校祭 代表3グループによるステージ発表(9月14日 発表人数10名)
- ・課題研究中間発表会(11月15日 発表人数45名)
- ・未来航路発表会(1月28日 発表人数45名)

④校外発表

- ・G20 岡山保健大臣会合での提言(10月19日 発表人数3名)
- ・きらり輝け!高校生キャリア教育フェア2019(11月24日 発表人数3名)
- ・全国高校生フォーラムへの参加(12月22日 参加人数4名)
午前中に2度、英語でポスターセッション。午後はテーマに基づき、他校生徒とディスカッション。ポスター発表の評価は50点中36点ですべての項目において平均を上回った。
- ・探究甲子園への参加(3月21日 参加人数6名)【主催者による中止のため未実施】
プレゼンテーション部門1グループ、ポスターセッション部門1グループが審査を通過し出場。
- ・オーストラリア海外研修中に Sacred Heart College(以下 SHC) で発表と意見交換
(3月14日~3月23日 参加人数12名)【臨時休業のため未実施】

⑤その他の活動

- ・SPICE (Stanford Program on International and Cross-cultural Education for Japanese High School student) の受講(9月~2月 受講人数2名)
2名が選考を通過(全国で30名程度)。週1回、日米の政治や歴史、文化等についてスタンフォード大学教授やシリコンバレーで活躍する起業家の講義をバーチャルクラスで受講、レポート、オンラインディスカッション、論文作成等の取組。
受講終了後令和2年3月、うち1名(2年次生)が最優秀賞(3名受賞)に選出され、令和2年8月アメリカでの授賞式に参加予定。
- ・令和元年度岡山県内高校生の韓国慶尚南道訪問団(7月25日~29日 訪問人数2名)
団員として2名が選考を通過し、韓国へ派遣。
- ・グローバルスキルトレーニング
本校外国人教諭が、英語で多岐にわたるトピック(グローバル人材やグローバルスキルとは何か、文化等)に関して講義やグループディスカッションを実施。英語力のブラッシュアップにもつながった。
- ・図書課との連携
課題研究に関する文献リストを作製し、図書館にその書籍コーナーを設置した。課題研究の充実とともに図書館利用にもつながった。

(ウ) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」

①授業で資質向上プロジェクト

統一テーマを「グローバル・リーダーの育成に向けた取組~Global Can-do List の活用と検証方法の開発~」と設定し、(i)「Global Can-do List」に沿った授業を行い、5つの資質・能力の向上を図ること (ii)学習者の変容をとらえる方策を開発して

いくこと等について、中学校・高等学校の教員が共通理解を図り、次の取組を行った。

- ・アドバイザースタッフ（大学教員等7人）による指導を6教科（国語，数学，英語，理科，地歴公民，芸術）で受ける。
- ・中高合同教科会議（週1回）
- ・中高合同研修会の開催（9月27日，10月1日，2月6日）
- ・「岡山操山中学校・高等学校教育研究会」を開催し，中高の授業を公開
- ・研究紀要「操山論叢」を県内の教育機関に配付し，研究の成果を普及
- ・県内外の学校が本校訪問時に，研究報告書等を活用し研究成果を普及

②英語力向上プロジェクト

教科のテーマを「Global Can-do List と SACLA (SOZAN Activity-based Can-do List for Achievement check) をベースに，言語活動を高度化させる指導法の研究」と設定し，(i)「Global Can-do List」の活用，(ii)中高接続を意識した授業実践の公開，(iii)学習者と授業者のPDCAの確立とともに学習者の変容と技能向上の関係を調べることを目標として次の取組を行った。

- ・自己評価シートの自由記述を活かした授業改善と学習者の3年間の変容の把握
- ・即興性を養う指導法の研究
- ・GTECを活用した学習者の技能面での客観的な指標による評価
- ・2回の公開授業による実践発表を通じた普及
- ・校内研修におけるCLIL（内容言語統合学習メソッド）の実験的取組

7 目標の進捗状況，成果，評価

(1) 具体的な検証方法や評価方法及び成果

設定した5つの資質・能力の育成状況をはかるためにSGHアンケート（1月末実施）とGPS-Academic（1年：5月実施 2年：12月実施）を実施した。

(ア) SGHアンケート（1月末実施）

5つの資質・能力に関する24のアンケート項目（1つの資質・能力に対して，5個程度のアンケート項目）を，4段階（1.全くあてはまらない 2.あてはまらない 3.ある程度あてはまる 4.あてはまる）で自己評価した。下表は，その平均である。

| 5つの資質・能力 | R1 1年 | R1 2年 | R1 国際塾 | H30 1年 | H30 2年 | H30 国際塾 | H28 1年 | H28 2年 | H28 国際塾 |
|-------------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|
| 幅広く深い教養 | 2.8 | 2.9 | 3.0 | 2.7 | 2.7 | 2.7 | 2.7 | 2.7 | 2.7 |
| 課題解決能力 | 2.9 | 2.9 | 3.1 | 2.8 | 2.7 | 2.9 | 2.7 | 2.7 | 2.9 |
| コミュニケーション能力 | 2.8 | 2.8 | 3.1 | 2.6 | 2.6 | 2.9 | 2.5 | 2.6 | 2.8 |
| リーダーシップ | 3.0 | 2.9 | 3.1 | 2.8 | 2.7 | 2.9 | 2.7 | 2.7 | 2.9 |
| 社会貢献の意識 | 3.1 | 3.0 | 3.3 | 2.8 | 2.7 | 2.9 | 2.7 | 2.7 | 2.7 |

①R1_2年次生について

H30_1年生（過回）と比較して全ての資質・能力，アンケート項目で評価が向上した。特に評価が向上（+0.3ポイント）したアンケート項目が2つあり，1つ目は「幅広く深い教養：様々な課題や物事を全地球的な視野で考えることができる」で，2つ目は「コミュニケーション能力：英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」である。要因として，1つ目の項目については，課題研究の充実が考えられる。課題設定

の指導方法改善で、しっかりとした課題意識を持った生徒が増えてきた。そのため、企業や関係機関にインタビューに出向くグループも増え、より教養や知識が深まったと考える。2つ目の項目については、英語の授業改善で、授業中のペアワークやプレゼン発表の深化が考えられる。

また、H28_2年次生（SGH 初期段階）、H30_2年次生（過年度）と比較しても全ての資質・能力、アンケート項目で評価が大きく向上した。集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30_2年次生と比較し特に評価の差（+0.4ポイント）が大きかったアンケート項目が「コミュニケーション能力：多様な人の考えや価値観を理解することができる」と「社会貢献の意識：岡山・日本・世界の課題を解決しようという意欲がある」である。この要因も課題設定の指導方法改善やインタビュー等の実施が考えられる。

一方で、H30_1年次生（過回）とH30_2年次生（過年度）と比較して、評価にほぼ変化がないアンケート項目が「コミュニケーション能力：英語でコミュニケーションをとることができる」である。前述の「英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」と相反する結果である。このことについて「プレゼンのように事前準備可能な内容は、英語での対応ができるが、英語によるより深いやりとりをする際の即興性が不足している」と分析している。この解決が今後の課題である。

②R1_1年次生について

H28_1年次生（SGH 初期段階）と比較して全ての資質・能力、アンケート項目で、H30_1年次生（過年度）と比較して「コミュニケーション能力：英語でコミュニケーションをとることができる」以外の資質・能力、アンケート項目で評価が向上した。集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30_1年次生と比較し特に評価の差（+0.4ポイント）が大きかったアンケート項目が「社会貢献の意識：岡山・日本・世界の課題を解決しようという意欲がある」である。R1_2年次生と同じ傾向にある。学校として取り組むべき課題や進む方向性が明確になったと考える。

③R1_国際塾について

H28_国際塾（SGH 初期段階）、H30_国際塾（過年度）と比較して全ての資質・能力、アンケート項目で評価が向上した。母数が少なく集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30_国際塾と比較し特に評価が向上（+0.5ポイント）したアンケート項目が「幅広く深い教養：様々な課題や物事を全地球的な視野で考えることができる」「課題解決能力：論理的に課題の解決策を考え、評価・検証を行うことができる」「社会貢献の意識：人類が目指す平和で民主的な社会について理解している」である。一方で、今年度アンケート項目で低評価だった項目が「コミュニケーション能力：英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」である。今年度は、多くのセミナーやフォーラム、発表会に参加してきた。そのため、生徒達が多様な経験や学び等ができ、全ての項目で評価向上に繋がったと考える。ただ、多くの素晴らしい発表にも出会うため、生徒の評価基準が上がり英語プレゼンが低評価になったと考える。

(イ) GPS-Academic（1年5月実施 2年12月実施）

GPS-Academicは「問題を解決する力」の現状を「思考力」「姿勢・態度」「経験」の観点で確認するアセスメントである。3つの思考力（『批判的思考力』『協働的思考力』『創造的思考力』）を定義し、ルーブリックによりS・A・B・C・Dの5段階で評価する。各力の定義は、次の通りである。

「批判的思考力」⇒「情報を抽出し吟味する」「論理的に組み立てて表現する」
「協働的思考力」⇒「他者との共通点・違いを理解する」「社会に参画し人と関わりあう」
「創造的思考力」⇒「情報を関連づける・類推する」「問題をみだし解決策を生み出す」

令和元年度2年次生は1年5月と2年12月に受験した。表は、そのデータである。

| | 批判的思考力 | | 協働的思考力 | | 創造的思考力 | |
|----|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| | 2年 | 1年 | 2年 | 1年 | 2年 | 1年 |
| S | 0.8% | 1.4% | 0.0% | 1.4% | 6.5% | 1.8% |
| A | 52.8% | 41.6% | 46.8% | 25.4% | 53.2% | 47.3% |
| B | 45.2% | 50.9% | 48.0% | 63.8% | 37.1% | 47.3% |
| C | 1.2% | 6.1% | 4.8% | 9.3% | 3.2% | 3.6% |
| D | 0.0% | 0.0% | 0.4% | 0.0% | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 100.0% | 100% | 100.0% | 100% | 100.0% | 100% |

「批判的な思考力」「創造的思考力」については、どちらもA以上の割合が10%以上増加した。特に「創造的思考力：情報を関連づける・類推する」の項目は16%増加した。要因として、授業改善（グループ学習やペアでの学びあい、ジグソー法やディスカッションを取り入れた授業の増加）や未来航路におけるディベート等が考えられる。この結果から、5つの資質・能力のうち「課題解決能力」が確実に育成されていると考える。

また「協働的思考力」については、A以上の割合が20%増加した。毎年、この思考力が弱い傾向にある。他の思考力と比べると低い、1年次生からの伸長度は大きく差は小さくなった。伸長の要因として、未来航路は1年次生からグループでの取組を主としている。KJ法やワールドカフェ等しっかりとコミュニケーションがとれる取組を行ってきた。課題研究においてもフィールドワークやインタビュー等の重要性について、しっかりと説明を行った。これらの取組の成果であると考え。この結果から、5つの資質・能力のうち「コミュニケーション能力」が確実に育成されていると考える。

(2) 中間評価を受けた改善事項の達成状況

(ア)「オーストラリア研修については、語学研修や海外体験を超えるものになっていない」

中間評価後のオーストラリア研修では、各グループがSHCで課題研究の発表を行った際、より深く現地高校生と意見交換を行った。また、課題研究深化のため現地でのフィールドワーク（日豪比較データを収集分析するよう指導）や南オーストラリア博物館や公共施設でのインタビュー、アデレード大学で大学生と交流を行った。そして、SHCと令和元年5月に姉妹校協定を締結した。現在、校内Wi-Fiが整備され、令和2年度入学生から全員がChromebookを購入する。Web会議システムを活用し課題研究等でSHCとより深く連携していく予定である。

(イ)「SOZAN国際塾が放課後・希望者のみの限定的な活動になっているため、内容を深められるような実践を行い、研究開発単位の1つとして充実させる必要がある」

中間評価後、学校祭や課題研究発表会、全校集会、併設中学校の学年集会等で、取組や成果発表の機会を増やしている。また今年度は新たな取組として、2年次系統別課題研究において各系統の場所で国際塾も研究を行った（昨年度まで国際塾で1系統として国際塾のみで研究を実施）。後述の8(3)(ウ)や8(5)(イ)の未来航路に対する校内アンケートから、国際塾以外の生徒に対して、意欲や取組に良い刺激を与えることができた。し

かし、思考過程や研究過程、そこから生じる新たな課題など他の生徒にとって栄養となる部分について十分に伝え切れていないため、発表や報告、課題研究の活動の場を通して普及できるシステム構築を検討している。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

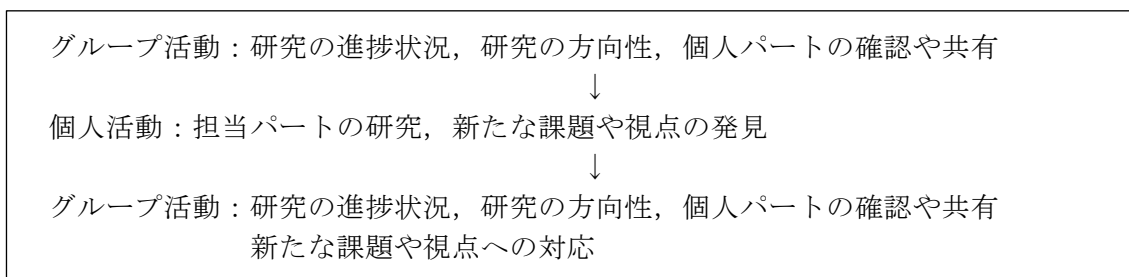
(ア) 「総合的な学習（探究）の時間」について

| | 平成 27 年度 | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 | 平成 30 年度 | 令和元年度 |
|------|----------|----------|----------|----------|-------|
| 1 年次 | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 |
| 2 年次 | 1 単位 | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 |
| 3 年次 | | | 2 単位 | 2 単位 | 2 単位 |

(注 1) 1, 2 年次は全員履修で 3 年次は選択履修である。

(注 2) 平成 28 年度より SGH に係る教育課程の特例により「社会と情報」を 1 単位とした。

上表のように、課題研究をより充実させていくために、平成 28 年度から 2 年次で単位数を 2 とした。2 年次における課題研究は 5 名程度のグループで実施している。このことにより、1 時間をグループでの活動、1 時間を個人の活動とした。



このように、グループ活動と個人活動を連動させることで、一人ひとりが役割や責任、課題意識をもって取組ができるようになり充実したものになった。

また、より深く研究を継続したい生徒のために、平成 29 年度から 3 年次で新たに「総合的な学習（探究）の時間」を選択できるようにした。毎年、5 名程度の生徒が選択しており、個人研究を行い、その成果を岡山大学で行われる「地域地理科学会」でポスター発表した。また、課題研究で身につけた GIS（地理情報システム）の基礎的技術を活用して、地域の小学生 20 名を対象に統計地図作成の指導を行った生徒や総務省等主催の統計データ分析コンペティション高校生部で特別賞を受賞した生徒もいる。そして、ほぼ全員の生徒が特色入試（A0・推薦入試）で進学先を確定し自己実現につなげている。

(イ) 教材開発について 教材名「ラーメンで世界進出」

対象：1 年次生 実施時期：1 学期

内容：社会とのつながりを意識させるために、「企業人による講演会」「ビジネス課題の発見」「進路学習」を融合した教材である。1 つのテーマに対して様々な系統（視点）からグループ単位で考察していく教材である。まず、グローバル企業である株式会社力の源ホールディングスアジア事業本部長から御講演をいただいた。その後、講演内容をリンクさせる形で、ラーメン会社を起業し、世界進出していく社長に対し「専門家として貢献できること（ビジネス課題の発見）」「貢献に対して必要な力の身に付け方（進路学習）」を文学系統、工学系統など 8 系統で研究を行い、ポスター発表するものである。

成果：生徒の感想で「各系統の発表を聴き、系統が異なっても実は繋がっていることがわかった」「同じ名前の学科でも研究内容が異なることがわかった」など、社会の構図に触れたものもみられた。また、この教材は「1つのテーマから見つめる学問領域の広がり」「身近なテーマを学問につなげる」「課題発見と進路学習の融合」という点が評価され、Benesse Corporationの「探究ナビ」や「GPS-Academic 思考力UPガイド」に掲載された。多くの学校や関係者に普及できたと考える。

(ウ) 修学旅行における課題研究について

対象：2年次生 実施時期：4月～6月

内容：本校の修学旅行は「マレーシア・シンガポール」「関東」の2方面で実施している。平成30年度の修学旅行から課題研究の取組を行っている。これは、事前準備を行い、訪問先で課題研究の深化を図り、ネットワークを拡げていくものである。また、グローバルな視点、ビジネスの視点を養うことも目的としている。

「マレーシア・シンガポール」方面

対象：シンガポール大学の学生、マレーシアの高等学校訪問先、ホームステイ先。

内容：シンガポール大学の学生と半日程度市内散策する。また、マレーシアの高校を訪問し3時間程度、学校交流を行う。ホームステイは、夕方から翌朝まで行う。そのとき、課題研究に関係するインタビュー（すぐに答えられるような内容）をする。例えば「ゴミの分類」「塾の存在や通塾率」「来日経験があれば、日本で困ったこと」など。文化や習慣の違いに着目する。

事前取り組み：課題研究グループで、事前に質問を考えておく。なお、英語で質問のやりとりができるように準備する。

「関東」方面

対象：企業、関係機関、大学など。

内容：半日程度、企業、関係機関、大学などを訪問する。課題研究テーマに近いグループで訪問班をつくり、課題研究に関係するインタビューを行う。

事前取り組み：課題研究グループで、事前に質問を考える。訪問班で、生徒が主体的に訪問先候補を考え、アポイントをとり、訪問計画書を作成し送付する。

成果：修学旅行の訪問班と課題研究のグループが異なるため、訪問班では他の課題研究グループの研究内容や取組状況を把握しながら訪問先の選定や質問事項をまとめる必要がある。そのため、グループ外の議論の場が設定できた。また、訪問時に直接質問することで、多くの有益な情報を得るとともに一次情報の有益性を知ることができた。

(エ) 授業での取組について

本校ではSGH以前より多様な生徒に対応すべく、選択科目を充実させ、少人数教育を押し進めてきた。特に英語・数学では2クラスを3展開し、生徒の希望をベースにした習熟度少人数学習を行っている。SGHではこの少人数を利用し、グループ学習やペアでの学びあいが自然と行われ、数学ではジグソー法を取り入れたグループ学習や、英語ではグループでのディスカッションやペアワークによるトレーニングなど少人数をフルに活かした授

業展開が多く見られるようになった。

このような授業での取組が課題研究でのグループ学習においても生徒の情意面でサポートになっており、場面がかわっても即座にグループ活動に取り組めるようになるだけではなく、質問の内容やそれに対する対応にも柔軟性が見られるようになり、即興性が以前よりも増している。

(2) 高大接続の状況について

(ア) 大学入試について

| | 平成 27 年度 | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 | 平成 30 年度 | 令和元年度 |
|------|----------|----------|----------|----------|-------|
| 受験者数 | 37 | 44 | 39 | 58 | 69 |
| 合格者数 | 14 | 20 | 11 | 27 | 27 |

個性や適性に対して多面的な評価を行う A0 入試や推薦入試に対して、国公立大学受験者数が、表からわかる通り増加している。その要因として、次の3点が考えられる。

① 授業改善の促進

研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」では、通常の授業でも5つの資質・能力を育成すべく、各教科に落とし込み、その教科の解釈を元に各資質・能力の到達度目標を設定し、リスト化した「Global Can-do List」を作成した。

さらに、毎年統一テーマを決め、各教科が主体となって教科テーマを設定し、グローバル・リーダーの育成に取り組む。その際、大学教員や総合教育センターの指導主事にアドバイザースタッフを依頼し、1年を通じて、授業改善に向けた指導をしていただいた。全体テーマは次のとおりである。

- ・平成 27 年度「グローバル・リーダーを育てるための授業改善に向けた取組～授業で育てる5つの資質・能力～」：各教科での目指す生徒像と到達度目標の研究
- ・平成 28 年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listによる授業改善～」：各教科で到達度目標表「Global Can-do List」を作成、運用
- ・平成 29 年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の研究～」：Global Can-do Listを授業に落とし込み、どう評価していくか授業と評価の一体化の研究
- ・平成 30 年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の開発」：Global Can-do Listの活用法の研究と学習者のPDCAの研究
- ・令和元年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の開発」：学習に向かう姿勢を育てる方策の研究（生徒の変容とPDCA）

この取組により、アクティブ・ラーニングを行う授業が増え、生徒の思考力や表現力などの向上が見られた。このことは、後述8(3)(ア)「GPS-Academic」参照。

② 課題研究の充実

課題研究において岡山大学の教員や大学院生等に課題設定、研究方法、成果物等を専門的な知見で直接指導していただき本校の目指す5つの資質・能力の育成ができた。そして、大学入試に際して学力だけではなく、課題研究を通して身につけた資質・能力や経験、その成果を評価してもらいたいと考える生徒が増加した。

③ 国公立大学の入試システムの変化

A0・推薦入試の定員の増加、後期入試の廃止や定員の減少などによる入試システムの変化への対応のため、多様な入試に挑戦する生徒が増加した。

(イ) 大学の単位履修制度について

現時点で、大学の単位履修制度の設置はしていない。

(3) 生徒の変化について

(ア) 多様な思考力の伸張（外部評価（GPS-Academic）の分析）

表は、平成 29 年度入学生におけるデータである。「批判的思考力」と「創造的思考力」において、A 段階の上昇度合いが、全国平均約 13%に対して、本校は約 23%と大きく数値を伸ばしている。様々な要因が考えられるが、先述した授業改善や課題研究の取組が主な要因であると考えている。一方で、「協働的思考力」は本校、全国とも全ての段階で数値が下降している。全国受験者数の大幅な増加や問題の質の影響などが考えられるが、本校において、例年この力が低調なので、解決に向けた工夫が必要である。

| 操山H30 2年生 | 批判的思考力 | | 協働的思考力 | | 創造的思考力 | | 全国H30 2年生 | 批判的思考力 | | 協働的思考力 | | 創造的思考力 | |
|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|
| | S | A | S | A | S | A | | S | A | S | A | S | A |
| S | 3.4% | 3.4% | 0.4% | 0.4% | 3.4% | 3.4% | S | 1.0% | 1.0% | 0.5% | 0.5% | 1.8% | 1.8% |
| A | 39.8% | 43.2% | 25.9% | 26.3% | 51.9% | 55.3% | A | 29.9% | 30.9% | 18.6% | 19.1% | 42.1% | 43.9% |
| B | 52.6% | 95.8% | 65.4% | 91.7% | 40.6% | 95.9% | B | 57.6% | 88.5% | 62.6% | 81.7% | 48.2% | 92.1% |
| C | 3.8% | 99.6% | 7.5% | 99.2% | 3.8% | 99.7% | C | 11.1% | 99.6% | 17.1% | 98.8% | 7.2% | 99.3% |
| D | 0.4% | 100.0% | 0.8% | 100.0% | 0.4% | 100.1% | D | 0.4% | 100.0% | 1.2% | 100.0% | 0.7% | 100.0% |
| 合計 | 100.0% | | 100.0% | | 100.0% | | 合計 | 100.0% | | 100.0% | | 100.0% | |

| 操山H29 1年生 | 批判的思考力 | | 協働的思考力 | | 創造的思考力 | | 全国H29 1年生 | 批判的思考力 | | 協働的思考力 | | 創造的思考力 | |
|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|--------|--------------|
| | S | A | S | A | S | A | | S | A | S | A | S | A |
| S | 0.0% | 0.0% | 2.2% | 2.2% | 2.2% | 2.2% | S | 0.2% | 0.2% | 0.9% | 0.9% | 2.0% | 2.0% |
| A | 20.1% | 20.1% | 29.7% | 31.9% | 29.0% | 31.2% | A | 17.2% | 17.4% | 21.7% | 22.6% | 28.5% | 30.5% |
| B | 66.7% | 86.7% | 60.2% | 92.1% | 52.7% | 83.9% | B | 61.7% | 79.2% | 62.1% | 84.7% | 48.7% | 79.2% |
| C | 12.5% | 99.3% | 7.9% | 100.0% | 15.8% | 99.6% | C | 19.4% | 98.6% | 15.0% | 99.7% | 19.4% | 98.6% |
| D | 0.7% | 100.0% | 0.0% | 100.0% | 0.4% | 100.0% | D | 1.4% | 100.0% | 0.3% | 100.0% | 1.4% | 100.0% |
| 合計 | 100.0% | | 100.0% | | 100.0% | | 合計 | 100.0% | | 100.0% | | 100.0% | |

(イ) 英語力の向上（外部評価（GTEC）の分析）

本校では英語の授業改善を進めており、GTEC for students（平成 30 年度からは GTEC）をアセスメントの一つとして活用してきた。（1, 2 年次生は 12 月、3 年次生は 6 月の受験）SGH がスタートして以来、授業改善の効果が少しずつ見られるようになり、特に 1 年次生でのスコア 520 以上の人数や 1 年次から 2 年次にかけてのスコアが著しく伸びている。平成 30 年度から GTEC に切り替え、4 技能を測定している。Writing と Speaking における伸びが大きく、表現語彙の獲得が大きな要因である。普段から表現することを前提に input を重ねてきた成果であり、授業改善が順調に進んでいる。

| グレード | スコア | 1年生 | | | | | | | | 2年生 | | | | | | | | 3年生 | | | | | | | |
|------|--------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|--------|----|
| | | H30年度 | | H29年度 | | H28年度 | | H27年度 | | H30年度 | | H29年度 | | H28年度 | | H27年度 | | H30年度 | | H29年度 | | H28年度 | | H27年度 | |
| | | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 | 単純 | 累計 |
| 7 | 710~ | 4 | 4 | 5 | 5 | 2 | 2 | 6 | 6 | 10 | 10 | 9 | 9 | 13 | 13 | 8 | 8 | 14 | 14 | 15 | 15 | 10 | 10 | | |
| 6 | 610~ | 21 | 25 | 19 | 24 | 24 | 26 | 15 | 21 | 22 | 32 | 43 | 52 | 33 | 46 | 26 | 34 | 47 | 61 | 46 | 61 | 44 | 54 | | |
| 5 | 520~ | 79 | 104 | 61 | 85 | 65 | 91 | 53 | 74 | 90 | 122 | 94 | 146 | 88 | 134 | 76 | 110 | 88 | 149 | 76 | 137 | 98 | 152 | | |
| 4 | 440~ | 124 | 228 | 146 | 231 | 114 | 205 | 120 | 194 | 114 | 236 | 93 | 239 | 93 | 227 | 119 | 229 | 86 | 235 | 86 | 223 | 81 | 233 | | |
| 3 | 380~ | 36 | 264 | 37 | 268 | 48 | 253 | 60 | 254 | 29 | 265 | 17 | 256 | 24 | 251 | 36 | 265 | 6 | 241 | 18 | 241 | 16 | 249 | | |
| 2 | 300~ | 2 | 266 | 3 | 271 | 5 | 258 | 6 | 260 | 3 | 268 | 0 | 256 | 2 | 253 | 2 | 267 | 1 | 242 | 2 | 243 | 1 | 250 | | |
| 1 | 10~ | 1 | 267 | 0 | | 0 | 258 | 1 | 261 | 0 | 268 | 0 | 256 | 0 | 253 | 0 | 267 | 1 | 243 | 0 | 243 | 0 | 250 | | |
| | スコア平均 | 509.5 | | 505.7 | | 502.6 | | 491.7 | | 524.2 | | 544.8 | | 538.3 | | 517.9 | | 552.3 | | 550.4 | | 551.3 | | | |
| | グレード平均 | 4 | | 4 | | 4 | | 4 | | 5 | | 5 | | 5 | | 4 | | 5 | | 5 | | 5 | | 文科省調査 | |
| | 対前年比 | | | | | | | | | 18.5 | | 42.2 | | 46.6 | | 32.8 | | 8.5 | | 12.1 | | 33.4 | | により未実施 | |

| GTEC（4技能）令和元年度3年推移 | | | | | |
|--------------------|--------------|--------------|-----|--------------|-----|
| CEFR-j | スコア /1280 | 2年（H30_12月） | | 3年（R1_6月） | |
| | | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 |
| B2 | 1190~ | 5 | 5 | 11 | 11 |
| B1.2 | 1060~ | 16 | 21 | 29 | 40 |
| B1.1 | 960~ | 44 | 65 | 49 | 89 |
| A2.2 | 810~ | 139 | 204 | 104 | 193 |
| A2.1 | 690~ | 56 | 260 | 25 | 218 |
| A1.3 | 520~ | 8 | 268 | 0 | 0 |
| A1.2 | 370~ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| A1.1 | 270~ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Pre-A1 | 0~ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 平均 | | 887.0(全国771) | | 946.4(全国784) | |

(ウ) 学ぶ意欲の向上（校内アンケートの分析）

表は、平成 28 年度と令和元年度における生徒データである。表からわかる通り、項目①、③、④において、評価 1, 2 の割合が大きく上昇している。この要因については、各中学校や受検生、保護者に対して本校の SGH の取組をしっかりと説明することで、SGH を理解し目的を持って本校に入学する生徒が増加してきたことや併設中学校も SGH として未来航路の取組を行っていることが考えられる。地域に対しての普及にも繋がっていると思う。また、教材開発や授業改善等の取組の成果もあると考える。

| 評価項目 | 平成 28 年度 | | | | | 令和元年度 | | | | |
|------------------------------------------------------------------------|----------|-----|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ① SGH 事業において求められているグローバル・リーダーの資質・能力とは何か理解している。 | 10% | 43% | 35% | 8% | 3% | 20% | 56% | 17% | 4% | 2% |
| ② 将来的に、国際的な視野に立った活動や仕事をしたいと思う。 | 20% | 32% | 34% | 11% | 2% | 21% | 37% | 33% | 8% | 2% |
| ③ 未来航路のねらいを理解し、前向きに取り組んでいる。 | 13% | 45% | 30% | 10% | 2% | 21% | 50% | 21% | 4% | 3% |
| ④ 未来航路の活動を通して、高い目標を持つようになった。 | 10% | 33% | 39% | 16% | 2% | 15% | 40% | 32% | 9% | 4% |
| 1：よく当てはまる 2：やや当てはまる 3：あまり当てはまらない 4：全く当てはまらない 5：わからない | | | | | | | | | | |

(エ) 留学に対する意識の向上

短期留学については、平成 30 年度に増加し、長期留学者も出始めている。これは「トビタテ！留学 JAPAN」や岡山県独自の留学支援事業の影響が大きいと考えるが、今後も引き続き留学の情報を提供し、生徒や保護者の中に留学に対する意識を高める必要がある。令和元年度、「アジア高校生架け橋プロジェクト」にエントリーをしている。

| | 平成 27 年度 (1年目) | 平成 28 年度 (2年目) | 平成 29 年度 (3年目) | 平成 30 年度 (4年目) |
|--------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 短期留学者数 | 0 | 2 | 0 | 6 |
| 長期留学者数 | 0 | 0 | 1 | 1 |

(注：短期留学者数は、10 日以上で姉妹校除く)

(4) 教師の変化について

表は、平成 28 年度と令和元年度における教員アンケートのデータである。表からわかる通り、項目①から SGH の取組に対して、教員の方向性の共通理解が図られている。ほとんどの教員が 1 サイクル (3 年間) したことで実際に経験したことが大きいと考える。そのため、項目②のように教員と生徒の間でイメージのズレが小さくなってきており、多くの教員から SGH の改善に対する意見が出るようになった。また、項目③から ICT 機器利用者が増えている。授業改善の取組成果の表れであると考ええる。

| 評価項目 | 平成 28 年度 | | | | | 令和元年度 | | | | |
|-------------------------------------------------------|----------|-----|-----|----|----|-------|-----|-----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ① SGH 事業において求めるグローバル・リーダーの資質・能力の育成を意識して日頃の教育活動を行っている。 | 29% | 58% | 10% | 0% | 3% | 40% | 54% | 6% | 0% | 0% |
| ② 教員と生徒の間で、グローバル・リーダーのイメージが共有されている。 | 10% | 42% | 40% | 6% | 2% | 17% | 42% | 33% | 6% | 3% |
| ③ 授業に PC、書画カメラなど ICT 機器を有効に利用している。 | 56% | 34% | 8% | 0% | 2% | 63% | 31% | 4% | 2% | 0% |

1: よく当てはまる 2: やや当てはまる 3: あまり当てはまらない
4: 全く当てはまらない 5: わからない

(5) 学校における他の要素の変化について

(ア) 授業の変化

表は、平成 28 年度と令和元年度における生徒データである。表からわかる通り、項目①、②の評価が上昇している。8 (4) で、ICT 機器利用や授業改善に触れたが、ICT 機器を利用した授業は、項目③、④からわかる通り、生徒にとって有益なものになってきている。授業改善が、良い方向に進んでいると考える。

| 評価項目 | 平成 28 年度 | | | | | 令和元年度 | | | | |
|----------------------------------|----------|-----|-----|----|----|-------|-----|-----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ① 授業に積極的に参加し、充実した学習ができてきている。 | 20% | 55% | 19% | 4% | 1% | 25% | 54% | 15% | 3% | 2% |
| ② 授業は、進路実現のための学力向上に役立っている。 | 37% | 47% | 12% | 3% | 1% | 44% | 44% | 8% | 3% | 2% |
| ③ 授業で PC、書画カメラなど ICT 機器が活用されている。 | 42% | 44% | 10% | 2% | 1% | 52% | 36% | 8% | 2% | 2% |
| ④ PC、書画カメラを利用した授業は、テンポがよく分かりやすい。 | 28% | 49% | 16% | 4% | 2% | 36% | 48% | 11% | 3% | 3% |

1: よく当てはまる 2: やや当てはまる 3: あまり当てはまらない
4: 全く当てはまらない 5: わからない

(イ) 保護者の変化

表は、平成 28 年度と令和元年度における保護者データである。表からわかる通り、項目④の評価が上昇している。これは、HP の更新頻度を増やし内容を改善したことが要因であると考ええる。そのため、項目⑤は大きな変化がないが、項目①の評価上昇に繋がっていると考える。項目①の評価上昇は 8 (3) (ウ) で触れたことも大きいと考える。

また、項目②③については、8 (3) (ウ) や 8 (5) (ア) で触れた通り、生徒の立場から授業や未来航路の取組評価が上昇しており、保護者の立場からも同様の評価を得た。SGH の取組が、しっかりと保護者にも伝わり評価していただけたと考える。

| 評価項目 | 平成28年度 | | | | | 令和元年度 | | | | |
|------------------------------------------------------|--------|-----|-----|-----|----|-------|-----|-----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ①SGH事業において求められているグローバル・リーダーの資質・能力とは何かということについて知っている。 | 11% | 44% | 27% | 11% | 7% | 24% | 51% | 21% | 2% | 3% |
| ②子どもは、未来航路に積極的に取り組んでいる。 | 19% | 39% | 29% | 8% | 5% | 23% | 48% | 20% | 4% | 6% |
| ③子どもは、学校の授業に前向きに取り組んでいる。 | 37% | 43% | 17% | 1% | 1% | 40% | 47% | 9% | 3% | 1% |
| ④ホームページなどで学校からの情報発信が効果的に行われている。 | 31% | 45% | 15% | 2% | 6% | 40% | 48% | 6% | 0% | 6% |
| ⑤学校からの情報は子どもを通じて伝わっている。 | 21% | 50% | 23% | 5% | 1% | 22% | 53% | 19% | 4% | 3% |

1：よく当てはまる 2：やや当てはまる 3：あまり当てはまらない
4：全く当てはまらない 5：わからない

(6) 課題や問題点について

3つの研究開発単位について、課題等を示す。表は、生徒・保護者データである。

| 評価項目 | 平成28年度 | | | | | 令和元年度 | | | | |
|------------------------------------------------------|--------|-----|-----|-----|----|-------|-----|-----|-----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ①将来的に、国際的な視野に立った活動や仕事をしたいと思う。(生徒) | 20% | 32% | 34% | 11% | 2% | 21% | 37% | 33% | 8% | 2% |
| ②家庭学習を毎日計画的に行っている。(生徒) | 16% | 39% | 32% | 11% | 2% | 17% | 38% | 32% | 11% | 2% |
| ③子どもは、家庭学習を毎日計画的に行っている。(保護者) | 21% | 41% | 28% | 9% | 1% | 21% | 42% | 28% | 6% | 3% |
| ④自己の教養を深め、各教科・未来航路の学習や進路について考えるために学校の図書館を利用している。(生徒) | 8% | 19% | 36% | 34% | 3% | 10% | 19% | 35% | 31% | 4% |

1：よく当てはまる 2：やや当てはまる 3：あまり当てはまらない
4：全く当てはまらない 5：わからない

(ア) 研究開発単位 I 「未来航路」

課題としては、高い目標の育成、課題研究における課題設定の時間確保、研究方法の改善である。

まず、高い目標について、8(3)(ウ)で、未来航路の活動を通して、高い目標を持つ生徒が増加しているが、項目①の評価や志望校調査の結果から、生徒にとっての高い目標とは、難関大学や医歯薬等の難関学部をさしていることがわかる。職業観レベルでのグローバルな高い目標は、あまり変容がない状態である。どのようにして高い目標を持たせるかが課題である。

次に課題研究について、毎年、課題設定に多くの時間を必要とする現状がある。課題が決まっても、研究途中で変更や再設定するグループもある。様々な手立てを講じているが、大きな改善に繋がっていない。項目④からわかる通り、知識のなさ、すなわち関連図書の読書量の少なさが原因の1つであると考えられ、課題(テーマ)があまりに壮大である、研究のイメージや道筋がわからない、課題(テーマ)を絞り込めないことになっていると考える。また、SGH指定当初、研究方法については、インターネットを中心とした調べ学習が中心になるグループが多かった。フィールドワークやインタビュー等は、8(1)(ウ)で示した修学旅行の取組を始めてから増加する傾向にあるが、十分とは言いがたい。読書量の増加、フィールドワーク等をする時間や場所の設定が課題である。

(イ) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」

課題としては、全校への普及、持続可能性である。塾生数は、SGH 初年度（平成 27 年度）は 1 年次生 4 名、2 年次生 13 名であったが、SGH 最終年度（令和元年度）には 1 年次生 20 名、2 年次生 25 名へ増加するとともに意欲のある生徒が多く入塾するようになってきている。グローバル合宿や海外研修、グローバルスキルトレーニング等の各プログラムも充実してきている。

まず、普及について、様々なプログラムを受講した塾生が、その知識や経験、ノウハウ等を塾生以外の生徒へ十分には普及できていない状況がある。学園祭や課題研究発表会等で、取組を発表しているが、思考過程や研究過程、そこから生じる新たな課題など他の生徒にとって栄養となる部分について十分には伝え切れていないと考える。発表や報告だけでなく、課題研究の活動の場を通して普及できるシステムを考える必要がある。

次に、持続可能性である。一部のプログラムは、予算が必要なプログラムであり、自走できるように、外部との連携やプログラムの改善等が課題である。

(ウ) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」

課題としては、まず家庭学習の質の向上である。8（5）（ア）（イ）で授業の変化について触れたが、項目②、③からわかる通り、家庭学習について生徒、保護者とも変化がない。学習に対する興味・関心は、向上してきていると考えるが、実際の行動に現れていない状況である。生徒の主体的な学習に繋がる授業改善をしていく必要がある。

また、本開発単位では、毎年 11 月に教育研究会として公開授業と取組に対する研究協議を行ってきた。校外外に呼びかけ、本校での取組を広く発信するとともに、特に校内では教科の枠を越えて、互いの指導法や授業で育成する資質・能力を共有し、学校全体の取組となるように様々な機会を利用して呼びかけた。この 5 年間の参加人数は次のとおりである。

教育研究会（公開授業）参加人数（全教科合算）

| | アドバイザー リースタッフ | 校外 合計 | 校内 合計 | 合計 |
|-----|------------------|----------|----------|-----|
| H27 | 10 | 65 | 110 | 185 |
| H28 | 13 | 63 | 136 | 212 |
| H29 | 12 | 84 | 119 | 215 |
| H30 | 11 | 39 | 128 | 178 |
| R1 | 7 | 60 | 124 | 191 |

校内的には教科の枠を越えて、互いの授業を参観することが通常となっているが、校外からの参加者が少なく、普及という点では課題が残る。また、各教科で設定した 5 つの資質・能力の到達度目標 Global Can-do List については、授業を行いながら生徒観察を継続し、授業で測れる資質・能力をもう一度設定し直す時期が来ている。

(7) 今後の持続可能性について

(ア) 研究開発単位Ⅰ「未来航路」

課題研究は SDGs を研究テーマと関連付けたものへと変更しながら、現在の取組を継続予定である。その際、課題研究について、現在は 2 年次で実施しているが、令和 2 年度入学生から 1 年次 10 月から課題研究を始めて 2 年次 9 月に終了する予定である。このことで、2 年次 6 月の修学旅行における課題研究の取組がより効果的になると考える。なお、

岡山大学の教員や大学院生等による指導については、来年度以降も継続できるように関係者で協議していく予定である。また、令和2年度入学生から全員がChromebookを購入することが決定し、令和元年12月には校内Wi-Fi環境が整備された。このことで、令和元年度に姉妹校締結したSHCとWeb会議システムを利用した新たな取組が可能となるので、プログラム開発に取り組んでいるところである。

(イ) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」

8(6)(イ)で示した通り、予算を必要とするプログラムについて整理する必要がある。校内で実施可能なプログラムは、体制作りを行い、難しいプログラムについては、関係者で協議していく予定である。

(ウ) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」

次年度からChromebookの導入やSDGsを柱とした課題研究がスタートする。それに伴い、Global Can-do Listの見直しを行い、さらなる授業改善へ繋げていく予定である。

(エ) 海外研修

例年3月実施の海外研修(姉妹校)については、費用や行程の検討を行いつつ継続できるように協議していく予定である。多くの生徒に海外研修の機会を与えるため、国の留学支援制度の活用や岡山県の留学支援金制度の活用を促進する。

(オ) 管理機関の関わり方

姉妹校と継続的に交流ができるように教員派遣のあり方、海外留学を希望する生徒支援のあり方、課題研究における岡山大学の支援のあり方、関係機関や企業と連携した効果的なSDGsの学習や取組ができる環境のあり方を協議しながら、引き続きグローバル人材の育成を進めていく。

【担当者】

| | | | |
|-----|----------------|--------|--------------------------------|
| 担当課 | 岡山県教育庁高校教育課指導班 | T E L | 086-226-7585 |
| 氏 名 | 森 良恵 | F A X | 086-224-2535 |
| 職 名 | 指導主事(副参事) | e-mail | sido-koukou@pref.okayama.lg.jp |